

A 4 〔生活〕探求への一試論—家政学における方法論的整備にむけて—
(その4) 問題の所在—家政学における「システム論」の有効性—

元福岡教育大 平田 昌 東筑紫短大の花崎正子
西九州大家政 河野孝子 佐賀大教育 赤星礼子

本報告は、上記テーマ；〔生活〕探求への一試論—家政学における方法論的整備にむけて—による第1報 問題の所在（1986年11月 第33回日本家政学会九州支部大会 於佐賀女子短大）、第2報 問題の所在—認識対象としての「家政」—（1987年5月 第39回日本家政学会 於共立女子大）、第3報 問題の所在—認識対象としての「家政」—（1988年5月 第40回日本家政学会 於日本女子大）に続く第4報である。

上記テーマについての基本的な探求目的と方途については、すでに、第1報、第2報、第3報においてふれた。すなわち、第1報では、「家政学の認識方法にもとづく認識対象」について、既発表資料について大体的に考察した。第2報では、それらの資料における認識対象としての「家政」についての諸見解をとりあげ、概括的な解析を試みた。第3報では、その「家政」についての認識方法としての「システム論」について、家政学で言及している諸氏の見解を披歴し、「比較」を中心に論を展開した。

今回は、上記に引き続き、「システム論」が、家政学の認識方法として、本質的に有効であるか否かを探るために、「システム論」の我が国における学問的ルーツ、発展経路及び現状を明らかにし、家政学研究の開拓に寄与しようとするものである。